

専用培土を使った新テッポウユリ育苗

1 はじめに

神戸市北区淡河町では、1953年頃から西村テッポウユリやBS系テッポウユリが栽培されていた。1967年頃は、実生一年で開花する系統を選抜し、新テッポウユリとして市場出荷した。2002年度作付け面積は8.5haで、7～10月にかけて出荷され、市場では高い評価を受けている。

2 良質苗への努力

実生栽培であるため、苗の品質がその年の生産に大きく影響する。連作障害が著しいため、毎年、育苗ハウスを移転していた。

<従来の育苗法は>

- (1) 毎年、育苗ほ場（水田）は移動した。
- (2) 自宅から離れていた。
- (3) 育苗期間が長く、2～3人の共同管理で苗数を確保した（11月～5月）。
- (4) ほ場によってフザリウム菌やリゾクトニア菌等の土壤病害がみられた。

特に(4)の現象が、年々深刻になっていた。



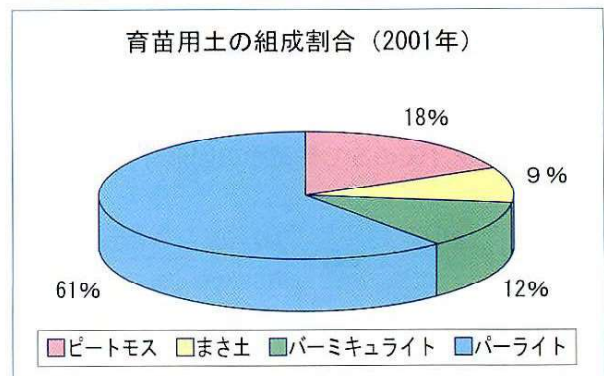
図 チューリップコンテナを利用した育苗

3 育苗用土の導入とその成果

そこで、園芸部と経済連（現：全農兵庫）の協力を得て、ユリ専用育苗土を開発して使用を進めた。

当初は「育苗用土を買うこと」に、かなり抵抗があった。そこで、面積の少ない極早生系統のペーパーポット育苗の用土として試作をすすめ、その結果、良質苗が得られ、その後の生育が良好であったため翌年から徐々に生産者間で専用培土の利用が広がった。

- (1) 水田から縁を切った育苗ほ場では、フザリウム菌やリゾクトニア菌等の土壤病害の発生が著しく減った。
 - (2) 毎年ほ場を移動する必要がなく、自宅近くで十分な管理ができるようになった。
 - (3) 根の状態が良くなり、苗質が安定した。
- これらのことから、2001年秋には育苗用土を購入することが当たり前になった。



- 肥料成分量（mg/1リットル）
- N-P-K：72-160-66（マイクロロング、BMようりん）
- 苦土石灰（PH6.0に調整するため）

4 今後の育苗法

土は買うものという意識付けができたことで、セル成型苗へ関心が高まってきている。面積拡大と品質の斉一化のため定植機の積極的な利用を視野に入れ、さらに安定した苗づくりを実践中である。

堀本 祥子（神戸普及センター）